

52 明治7年8月15日 菊池長閑宛

第四号 八月十五日認む
(長閑注記)

愈御機嫌能御銷夏被遊奉慶賀候さて私去月十六日午後第一時半
新橋ステーションより蒸氣車ニテ神奈川迄参り日中暑甚々歩行
ニ勉ならざるを以而人力車ヲ雇日暮藤沢ニ着夜着布団甚不潔ニ
て蚤虱ノ攻撃を受蚊帳穴アルト見得て蚊多這入夜半後漸ニ眠ニ
就候翌朝平塚まで歩行此日朝より晴渡り馬入川辺ニ富士を見候

所実ニ画も不及景色ニ御座候故私の下手絵ニは述も画不申候大機ニ休候所茶亭担端より江島を遙望致候明日ハ祇遠の御祭とて日の丸の旗を建居候總而此辺休暇日とても日章旗を掲ケ甚々奇なり途中伊豆の大島を望午時小田原ニ憩東京より此ニ至まで大中教院及小野組定宿駅ニ有サルハなし陸運会社及元会社の支店も頗多し午後二時頃歩して湯本ニ赴傘笠日を覆ト雖瓦石土焼て熱を反射するか為大ニ困惑仕候三枚橋より右ニ折て湯本福住ニ着福住ハ当地第一等の家にて殊私共奥上段とて第一の室ニ居候故皆て喜候先湯室ニ至れハ湯ハ鶯宿るも清朗かと覚え初入時ハ余り漸温と思候得共暫あれは宜程に温まり咄ニ聞なまりの湯ニ同しかるへし家屋器具總而清潔度々卷絵の膳腕を出し御馳走も相応去レモ会席とハ違ひ久振ニテ御法事か御祝儀ノ座ニ連たる心地致候主人は皇学者にて人物も中々面白き方數議論をなし或ハ古事記等の講解を聞くに頗ル国書ニ明く當時權少講義兼而区長を勤由十八位の男兒アリ親子兩人頻ニ来て話其上私共六人連なれハ余り退屈ハ不致候東京より此地まで多くハ一日ニ参候湯本ハ箱根七湯の入口ニテ一夜泊り多く私共の如く滞留する者甚少し一丁許離れ東海道ニ早雲寺アリ御存も可有之此寺ニハ北条五代早雲氏綱氏康氏政氏直の碑有之寺ハ今も学校にて生徒男女合せて三四十人皆高机ニ椅子を用ユ宿の的人の話なれば足柄県下小学の盛なる近国比なしト私其信す可を覚候主人の著書富國捷経アリ其他箱根七湯志翻訳書漢書和書藏書頗多し廿二日荷物を福住ニ預ケ塔ノ沢を経て宮ノ下ニ至る皆登路にて余程難渋此地ハ高燥風景ハ美なり小田原海を見るト去フ湯ハ湯本より熱く礪氣も多

し併甚微なり同県人斎藤も亦來り同家ニ宿ス蛇骨石葡萄石箱根草等を産す底倉ニ至る蛇骨川其東を流る早川の上流タリ堂ヶ嶋ニ赴ク宮ノ下より坂を下る「五丁谷底なり翌朝木賀ニ行新道アリ十丁なるへし此辺箱根に至まで蚊帳を用す戸数湯本十八宮ノ下廿五底倉十三堂ヶ嶋五木賀三堂ヶ嶋賀戸数少しと雖モ一家皆數十人ヲ宿すへし外国人多く来遊ふ宮ノ下ヨリ三人連ニテ葦湯へ向途上地獄を見芦湯ニ至まで路皆山坂登「ありて下る「なし其上暑氣甚しく殆ト氣絶する如く午前十一時頃漸達ス湯頗熱く礪氣亦甚し箱根宿より高くして淒涼なり然礪臭甚しく私共無病者の居所ならずクサメ草を産す之を乾し粉ニして煙管ニ詰或ハ鼻穴ニ入れハクシャミ必生す晩饗後芦湯を立て箱根ニ行途上曾我兄弟及虎女ノ碑アリ源満仲の碑賽の河原地蔵尊アリ小湖多し本海道ニ出時日全暮れ權現祠前道樹の繁所隨分寂しく然レ共駅口ニ至るや否や宿引なる者数十人來て甚喧し私共皆顧して破る屋ニ投ス室湖ニ臨ミ眺望美ナリ翌日舟ヲ倩湖水を渡る一里半陸ニ上テ歩「八丁姥子ニ達ス家屋頗矮小湯頗熱木葉石を産す帰時雲晴富岳湖水ニ映す風景甚美なり舟ヲ權現ニ着權現祠中見所なし坂下大釜ニアリ文永二年鑄所ナリ箱根の峻坂思所ニ勝る私共下道なりト雖モ頗困ム然に老嫗ビートロ屋坡豫器を荷テ登るを見大ニ奮発して下る日暮福住ニ着卅日本宿の書状達し披見候所無事ニテ上海ニ在よし湯本在留中ハ勿論学校ニ在ても常ニ角立言語を用す却テ同県人よりも親しく致候故下婢等皆同県人ト思私共否ト云ても右ハ信セざりしか段々日を経て是ハ九州彼ハ奥州此奴ハ中國已ハ四国ト為知候所皆驚て如何して其様ニ親しきかと

云し程ニ候間御祖母様ニも御心配被下間敷候八月一日四人ニて
湯本ヲ発し小田原々車ニ乗候処雨降出桐油を張候故見所なし酒
匂川北岸ハ外国人隨意遊歩地の界タリ藤沢より右ニ折て江島ニ
趣讀岐屋ニ投す三階ニて眺望美なり魚穀尤美味此地ニ求候寿命
貝ハ幸便差上候間 御祖母様ニ御上ヶ被下度候少々風ハ惡候得
共隨分奇麗ニて之ヲ鉢植ニ植候得ハ素より生物ニ無之故何年も
枯さる由併せて皆様の御長寿を祈且つ悦敷印ニ御座候当日も翌
日も波高故逐ニ巖屋ニ至らす翌午前十一時鎌倉ニ向腰越村ハ義
経此ニ至て鎌倉ニ入ヲ得さる所七里浜ニ小兒數十人皆裸体客ヲ
要して錢ヲ乞なれハ高波を凌て泳浜辺數沢水の追及す所トナル
稻村ヶ崎を横ニ見て権五郎社ニ至る袂石手王石アリ長谷ノ観音
像の丈ヶ三丈三寸木ハ楠ニして大和長谷觀音ト同木タリ側弘法
大師鉈一挺ヲ以テ彫たる出世大黒有大仏ニ至る仁王門あり西洋
人の寄附スル所像身五丈周囲十六間二尺胎内ニ入テ呼ハ反響甚
し三橋ニ憩フ鶴ヶ岡八幡ニ詣社側重宝を陳列ス別紙目録アリ階
を下左ニ折て行道左大江広元島津忠久ノ墳及頬朝の館跡あり然
れ共館ハ今皆烟ニて跡認むへからず護良親王の社及土窟を見其
他名所旧跡有ト雖見ニ違アラス此辺烟にて田甚少ナシ町畠歩ノ
名称を不知何貫何百何十文ト云フ真桑瓜西瓜薩摩芋多し三橋ニ
一宿翌三日金沢ニ達ス駅口九覽亭より八景ヲ見る此日風頗烈然レ
通を経て金沢ニ赴滑川之傍青砥藤綱の十錢ヲ落し所朝此奈切
共東屋を発し舟を僦て野島々横須賀ニ至る同県人台佐々木の二
氏此ニ在乃チ先導を乞テ造船所ヲ見器械鋸前鋸物の製造鍛冶場
安利場木ヲ截刻り繩ヲ索皆蒸氣機関を用ニ之ヲ用サルハ只に繩

ヲ索船ヲ造ルノ二術ノミ機械の大なる者三十五馬力三百馬力ノ
軍艦百二十馬力ノ運送船各一艘造作最中なり工夫千余人外国人
二十余人船舶を造る凡六艘十馬力位の船ハ時々之ヲ造ルト云フ
翌朝再ヒ往見る十時蒸氣船ニテ横浜ニ着市街往年ニ比スレハ奇
麗なる家屋ノ多ヲ覺ニ瓦斯燈の器械を見五時汽車ニ乗し新橋ニ
達ス此度の旅行清涼地ニ遊名勝地を覽旧跡を尋ね忽文明開化の
域ニ転し実面白御座候当地暑氣大分強候得共九十度余の暑ハ無
之候一條様御下之節書状差上度と存候得共笞根行ニて忙しく遂
ニ其儀ニ不及併書状より慥な便ニテ 御祖母様も御喜ニ可有之
と存居候此度一條様へ書状差上度候得共彼是御返ニ可有之依て
轟ながら御伝言を奉願上候先ハ旅行の略記并安着為御知申上度
如斯ニ御座候草々頓首

八月十五日

御尊父様
御座下

武夫拝

(長閑注記)

〔〔朱鷺〕八月廿五日達し返事同三十一日此方第五号ヲ以川村実ヘ頼之〕」